

## 『白鳥信仰と鳥インフルエンザ』

文 中島 功

text by Isao nakajima



## Profile

東京都出身、東海大学医学部救命救急医学教授、医学博士、博士（応用情報科学）、日本救急医学会救急指導医、同専門医。  
現在、研究にシフトし、鳥インフルエンザの研究のためベーリング海、カムチャッカ、タラン島などで貴重な調査データを得ている。  
趣味の映像撮影を故白石一成氏に、さらにスティールを写真家、井村淳氏に師事。日本人唯一の米国プロ空撮写真家協会会員。  
上の写真はゴビ砂漠縦断で同行した井村プロによる。

『古事記』は、712年、太安万侶（おおのやすまろ）によって献上された日本最古の歴史書ですが、この中には信仰や文化の基底を書き留めた箇所が散見されます。白鳥（シロトリ）の話もその一つです。

古事記では垂仁天皇の命を受けたヤマベノオオタカは、白鳥を追う旅に出て、最終的に和那美の水門（現在の新潟）で白鳥を捕っています。歴史家・作家 谷川健一は、大和政権成立以前に東北地方で存在していた熱烈な白鳥信仰を著書『白鳥伝説』で詳しい分析を紹介しています。この文化は縄文時代からの日本固有の信仰であるが、大陸にも類似の文化を持つ部族が居ると。

私は、医師としてこの『白鳥伝説』は、鳥インフルエンザと深く係わっており、どの時期に誰により大陸から日本に持ち込まれたのか、母系に引き継がれるミトコンドリアDNA解析にその糸口を探ってみました。

しており、シロトリに变身し天上人となることを意味しているのではないかと私は推測しております。

ミトコンドリアDNA解析は、ここ10年に飛躍的に進歩しており、発掘される骨の形態学的な分析では行えなかった人の拡散を遺伝子統計学で算出するもので、母系の地理的、時間的な拡散を示唆しています。これまで骨学に基づいた推論、例えばアメリカ大陸の先住民の起源の一つにバイキング（ヨーロッパ系）との混血という学説は、ミトコンドリアDNA解析により完全に否定されています。そこでバイカル湖から南下し、日本に渡来しているミトコンドリアDNAのグループを調べると、ハプログループA5を見出せます。A5は7000年（±2800年）前にA4から枝分かれしており、日本と朝鮮半島に唯一存在するサブグループで、バイカル湖から朝鮮半島、日本に一直線に向かっています。A5の人々が日本にたどり着いた時期は、サハリンを経由して北海道から日本全土に拡散した初期の縄文人のかなり後で、縄文中期、少なくとも水稻技術（稲作・太陽・鳥文化）を持った朝鮮半島の人々が大挙し渡来する前です。A5を持つ人々は日本の新潟・東北地方にも現存し、この地にはハクチョウを対象とした白鳥信仰があります。ただ、A5を持つ人々と白鳥信仰の家系を正確に追っているのではないので、

歴史的に古や祀りごとは、古墳時代以前、女性が司っており、記録メディアが無い時代は、口述や実演、つまり人により初めて祀りごことが広まりました。旧石器時代、縄文初期は、日本は大陸と陸続きで、人の往来には海運は関与していませんが、その後、日本海により隔てられ、日本に流れ着いた人材から教えられる占ごとや宗教は、土着のそれと融合し、独自の発展を遂げたと思われます。奈良時代以前は、男女それぞれの権力者が、つまり、政は男性、祀りごとは女性が担い、二つの権力が融合したのが天皇、その経緯をまとめあげ、大陸を意識した対外的な書が『日本書紀』、国内向けが『古事記』と見ることができます。

谷川健一もシベリヤのバイカル湖のほとりに住むブルーアド族の白鳥信仰と関連していると推測しています。東北地方やバイカル湖で言うシロトリとは、ハクチョウのことで、天皇が即位の時に着用する白い衣は、この信仰の上に成り立つ統計学的な証明にはならないのですが、A5と白鳥信仰の関連を示唆していると考えます。

東北地方にはハクチョウを食べると死に至るという寓話が存在し、これは戒めという意味以外に、高病原性鳥インフルエンザに感染した個体が容易に村人に確保され、その肉を食らった村人が鳥インフルエンザに感染し、死亡した過去の歴史を反映し、疫学的な教訓を語部が伝えているものと推測します。実際、縄文後期には、日本の人口（その多くは東北地方に住んでいた）は、90%も減少し、その原因は、感染力の高い疫病と考えられ、鳥インフルエンザはその原因の一つと考えています。このように鳥と人々の健康は古代より深く結びついており、それは寓話として、歴史を投影し、人々への警鐘となっていると思われる。

参考文献 谷川健一『白鳥伝説』集英社

